

ぶらりわが街宮沢界限

⑭ 水辺の散策 ― II ― ホタル舞う用水

○ 九か村用水(くかむらようすい)・現在の昭和用水、通称「立川掘」

多摩川の福生市境近くの水鳥公園入口の中腹に「拜島水神様」が静かなたたずまいを見せ、その真ん前の堤防に「九か村用水樋管(といかん)」の取水口跡が見られる。九か村用水とは、多摩川の左岸拜島村から水を引いて、田中・大神・宮沢・中神・福島・築地・郷地の各村を流れ、柴崎村(現立川市柴崎町)に至り、再び多摩川に入る用水のことで、江戸時代の延宝(えんぼう)年間(1673~81)頃には、既にできており、これらの村々の灌漑(かんがい)に供したものである。「九か村用水樋管」は、明治44年(1911)に設置され、「水神」の碑は、その用水樋管建設の困難な事業完成を記念して、村民が建立したといわれている。

現在の用水は、この取水口跡の約260m下流にある、昭和8年(1933)築造の「昭和堰(せき)」から取水している。なぜ? 昭和用水が昭和堰からひかれたのかは、昭和3年(1928)に、都の人口増にともなう都民の飲料水確保へ向けて、村山・山口両貯水池が完成し、「玉川上水羽付堰」の取水量が増やされたために、湯水期には昭和用水の取水量が、多摩川からの流量のみでは不足し、そこで、取水施設を下流の多摩川と秋川との合流点に移し、昭和堰による灌漑取水量の確保を図った。しかし、堰き止め法が蛇かごのため、毎年出水ごとに流出し、用水が止まる事態が繰り返され、昭和30年(1955)一部コンクリート溢流堰として完成。さらに、昭和50年(1975)現在の全延長400m近い全面コンクリートブロック堰が完成した。

○ 身近な自然を守ることの大切さのシンボル「ホタル」復活「水辺の散歩道」(大神町4丁目)

初夏の風物詩であるホタルは、清流だけに生息しています。その昔、市域の用水のあちらこちらで美しい光を放っていましたが、しかし、市域の用水の多くは多摩川から取水しており昭島市や上流の市町村の都市化により、工場・生活排水による汚染や、河川の改修工事などで、昭和50年頃にはホタルの姿は見られなくなりました。だが、昔のようなきれいな川にして、ホタルが生息できる自然環境をよみがえらせたいと願う、地元の有志達が、住民に呼びかけ多くの人々が用水路の清掃を始め、それに、下水道が安全整備され、生活排水等による汚れもなくなり、きれいな川が維持され、少しずつホタルが見られるようになりました。

現在は、ホタルの保護団体(昭島ほたる会・宮沢ホタルの会・等)が卵を人工飼育し、成虫を用水に放っています。市域では、玉川上水、田中堀、中沢堀そして、昭和用水の右岸、平成17年(2005)3月に市制50周年記念として完成した「水辺の散歩道」付近がホタルを数多く見られた。(※現在は中止)市域で見られるホタルの種類は、1番大きな体をした「ゲンジボタル」で、ホタルは6月の産卵から1年をかけて成虫になります。大体6月の初旬から中旬までの半月間に羽化をし、羽化した成虫は、日没30分から1時間(午後7:30~8:30)が最もよく光るが、その後はあまり光りません。飛び回っているのは大体がオスでメスより強く光ります。

記

防犯宮沢支部会計 西山 禎一

